

# 多様な社会における多文化教育アプローチとしての 多様な視点の尊重と涵養

ジェフリー・A・S・モニーツ

## 〔抄 録〕

本論文では、ハワイで得た多文化の経験をもとに、特に多文化教育アプローチに焦点を置いている。著者はまた、「ハワイ特有の」多文化を構築するのに大きく寄与した日本の子供向けテレビ番組に着目し、そのため1970年代に島で放映された日本の二つの特撮番組、レインボーマンとキカイダーに注目することで、本論文の主題であるハワイの複合的な視点の概念の意味を明らかにしている。

キーワード 多様な視点, 多文化, 多文化教育, 民族同士の調和

## 1. 「多様な社会における多文化教育アプローチとしての複合的な視点の尊重と進展」

ハワイのモロカイ島にあるマウナロア市民公園で行われた野外コンサートを見に来ていた大勢の観客に、すがすがしい山からの風が涼をもたらしした。舞台では、有名なネイティブハワイアンのギタリスト/シンガーである Willie K<sup>1</sup> がアコースティックギターをつま弾きながら、ゆったりと座っている。彼が奏でる柔らかな音色は、子供時代から聞きなれたもののようであったが、突然彼は穏やかな演奏をやめ、目に見えない悪人に向かって、急に日本語で罵倒し始めた。Willie K が、昔流行った日本の子供向け番組のヒーロー「キカイダー」が、人間の姿である「ジロー」で登場する時の物まねをしている事に、観客の多くは気づく。番組内で毎回ある見せ場を Willie K は演じていたのであった。ジローは物語の中で怒りに燃えて悪人と対決する時、穏やかなギターの演奏を止め、決まり文句の後、題名になっているアンドロイド（人造人間）「キカイダー」への変身シーンと続くのである。毎話、力強いテーマ音楽が流れる中で、キカイダーは悪人を倒す。Willie K は、このモロカイでの夜、完璧に変身シーンを演じきり、歌を披露し、こう歌った。

「スイッチオン、1-2-3。電流火花が体を走る。ジロー、チェンジ、キカイダー。ダークロボット迎え撃て。人造人間キカイダー。チェンジ、チェンジ、ゴー、ゴー、ゴー、ゴー。ゴー、ゴー、ゴー！」<sup>2</sup>

観客の多くが喝采する。そして、その他の観客は困惑したようであった。1970年代のハワイ

に住んでいたか、その頃のハワイをよく知っている人は皆、Willie Kが何をしていたか理解していたが、観光客や移住者、またはその頃とかかわりを持たない若い世代は、説明を聞くまで何が起こっていたかわからなかったのである。このコンサートでの会話を聞く限り、ジェネレーション X<sup>3</sup>と呼ばれる世代の観客の多くは、子供時代の懐かしい思い出の再訪を楽しんでいたようだった。

キカイダーや他の日本のテレビ番組は、70年代のハワイで育った子供達の間で非常に人気があり、子供達は地元の日本語番組専門チャンネルで定期的に放映されていた番組の主演である、お気に入りの日本のスーパーヒーローの手柄を、本気で真似ていたのである。これらの番組はすべて日本語であったが、英語の字幕がついていた。多彩な民族的背景を持つハワイの若者の間で、キカイダーと他の特撮シリーズ<sup>4</sup>の人気は調査に値する現象なのだった。<sup>5</sup>この現象を調べることは、私がハワイの「地元」多文化と呼んでいるものを考察し、理解するうえで良い視点を与えていると信じている。さらにこの調査は、この研究の最終目標である多文化国家ハワイの「多様な視点」という概念のニュアンスを説明する上で、非常に効果的なのである。

ツアーガイド、政府の指導者たち、普通の人々、そして非常に尊敬されている学者など、ハワイの大勢の人々が多文化に基づく多様性を強調することで、ハワイの特徴を述べている。ハワイの多文化に基づく多様性を強調する上で引用される論説は、「世界中からの移民が平和に共存しているように見える」（Lind, 1938）場所だということを力説している。ハワイの多文化社会を説明する上で、「チャプスイ（寄せ集め）社会」（DeLima, 1991）や「盛り合わせ文化」（Grant, 2000）といった、多民族が貢献している混成社会という言葉で表現することが流行ってきた。これらの多様な貢献が一つに合わさって、共通の「郷土的」多文化を構築し、この郷土文化はネイティブスピーカーの間では「ピジン語」と呼ばれる「クレオール語」にも反映されている。ピジン語・郷土的言語文化<sup>6</sup>に関するより詳しい考察が、歴史的、文化的、そして社会言語学的に見ても、重要なことに間違いはないが、ここではハワイの多文化的側面の中の複合的な視点の尊重という部分に特定して焦点を当てていく。この論文の残りの部分は、二つの重要な部分から成り立っている。第一では、簡単にハワイの地元多文化について手短かに説明し、それが、いかに多様な社会での多文化教育のための有益なアプローチになる、万国共通な現象の中での特定の実例になっているかを述べていく。そして、日本がハワイの地元多文化へ貢献している二つの特別な例として、レインボーマンとキカイダーマンを取り上げる。ハワイ多文化の複合的な視点の意味をさらに詳しく説明するために、レインボーマンとキカイダーの実例を使う。この議論には、特撮ジャンルとそのハワイにおける重要性についての分析を含む。

## 2. 多様な視点とハワイの地元民

### 2-1 地元 (ハワイ) 文化

経済がプランテーション中心だった時代から、ハワイの人口は二分されていた。白人が、プランテーションオーナー、マネージャー、監督者、資本家、商人といった有力なポジションのほとんどを占めていた。非白人たちは、プランテーション労働者、サービス労働者、家政婦といった骨の折れる仕事を、わずかな給料で従事していた。地元のアイデンティティと文化の根本は、こういった共通の階級経験から発展してきた。他の民族に対する平等主義的な姿勢も、長い時間の中で、近くで共に生き働くことで促進された親密さから生じたものであり、最も重要なことは、非白人で、原住民でない人が、一般的な慣習であったアロハという背景にある価値観を取り上げたことなのである。それには本当の土地本来からのものと、有力な白人が人種特権を隠し、社会的支配を確立し、島への観光客を呼び寄せるために、促進した考え方の両方がもとになっている。

白人のエリート達が促進するこの人種のるつぼという理想を、非白人の人達は喜んで受け入れた。この作り話がこのハワイという土地本来の価値観であるアロハに基づいたものであり、この島の社会的状況が労働階級の間で民族の壁を越えた協調を受け入れることのできる段階であったため、非白人たちは、あっさりこの作り話を信じ込んだのである。ハワイの価値観である、アロハ、もしくは愛が結束を促し、民族間の壁を越えた同盟の誕生を進めた。

さまざまな民族出身の、非白人労働者達が同盟を築いた。フィリピン人、日本人、中国人、スペイン人、ポルトガル人の労働者達がお互いに協力し、彼らの連帯によって、農園主が、スト破りの常套手段として、民族グループ同士をうまく立ち向かわせることができなくなった。1920年には、民族合同のストライキが起き、ついに農園主に要望を聞き入れさせる事に成功したのである。これは、民族の壁を越えた協調感、一体感の証となった。

この民族の壁を越えた協調は、1931年から1932年の「Massie Case」にまつわって公表された一連の事件の中で、さらに団結を強めた。全国的に大きく報道され、センセーショナルに取り上げられたこの事件は、申し立てによると、米国海軍士官の妻が、5人の若者にレイプされたというものであった。そのうちの2人はネイティブハワイアン、2人は日本人、そして残る一人がネイティブハワイアンと中国人のハーフであった。このレイプ事件は陪審不一致となったが、申し立て上の被害者である Thalia Massie の夫と母親はこの結果に怒り、2人の海軍兵学校生徒を伴って、申し立て上の加害者の1人である Joseph Kahahawai を、自分達で勝手にリンチしたのであった。勝手に制裁を加えたこの白人達は、殺人で有罪となり、重労働10年という量刑が宣告されたが、その直後、赦免を言い渡され、1日を知事執務室にて過ごす刑に変更された。この事件は、自分達を「地元の少年たち」と全く一体であると感じていた非白人にとっては侮辱であった。紙上メディアを通して、または噂話でも、「Massie Case」の議論は、

多様な社会における多文化教育アプローチとしての多様な視点の尊重と涵養（ジェフリー・A・S・モニーツ）

初めて「郷土」という言葉が特別の意味を持って使われたときだったとして、よく引用される。（Rosa, 2000; Yamamoto, 1995）

第二次世界大戦中、非白人たちと島に配置された多数の白人軍人との区別がさらに明白になると、民族の壁を越えた地元の一体感はより強固なものになる。1946年の大規模な砂糖のストライキという形で、団結力が再び証明された。多様な民族出身の労働者すべてが、自分達が共有するアメリカ白人による不当な扱いの経験を基に団結して、CIO-ILWUという労働組合を立ち上げたのであるが（Rademaker, 1947）、共通の個性である Aloha を促進することによって強化された民族同士の調和によって、この同盟は作られたのです。

共通するこの個性は、仕事、学校、教会、地域、レジャー、家庭、そして結婚などはその代表であるが、異なる民族間での社会交流を通して、時と共に融合していく。（Okamura, 1998）様々な性質の特徴が地元文化に取り込まれていった。「楽天主、友好的、開放的、すぐ信頼する、謙虚、気前の良い、家族と友人には誠実、地位の差にとらわれない」といったものがこれに含まれる。（Okamura, 1998, p.268）これらの性質はネイティブハワイアンを肯定的に特徴づけたものであり、これらはアメリカ白人の価値観が重要視する「率直さ、競争心、個人主義、地位の取得、個人的でなく契約上の関係をもつ必要性」と全く対照的なものである。Jonathan Okamura は地元民についてこう説明しました。「ハワイの人々の共通のアイデンティティーと、島の土地や人々、そして文化の本来の価値への感謝を、地元民が主張するようになってきている。」（Okamura, 1980）

## 2-2 複合的な視点

ハワイでは、「あるときは模倣し、またあるときは植民地の経験に抵抗している」というように、地元の意識は分断されています。（Chang, 1996）Chang は地元意識を、状況によって変化する柔軟な性質をもつものだと的確に表現している。時によっては、ハワイの地元民は白人アメリカ人の価値観を表し、時によってはより多くハワイの価値観を表し、また時によっては、白人でもハワイ人でもない先祖の民族の価値観を表す。それぞれの価値観の間での流動性のため、「地元らしさ」を把握するのは困難なのであり、多様性と柔軟性が地元意識を描写する上で鍵となるものと認識する必要がある。

## 2-3 多様性

多様性を尊重することは、地元民にとって極めて重要である。民族的背景の多様性であろうと、混合主義の世界観を持つことであろうと、通常の民族特有の性質と異なる世界観をもつことであろうと、多様性は地元民の必要不可欠の性質なのである。

多様性の尊重は、多文化主義、多文化教育においての中心的な原理なのだ。子供達が今日の世界で役目を果たし、成功していくには、多文化主義を身につける必要がある。もし、教育者

が公正で人道的な社会に貢献しようと本当に思っているなら、私たちはすべてのグループ、そしてしばしば相反する世界観を取り込む民主社会を構築する必要がある。多文化社会、そして、多文化で多世代の家族の中で育った人々の、経験を通して身に染み付いている方法がそれを約束する。特にこの方法は、中間的な立場にたった指導モデルを伴い、それにより色々な背景を持つ学生達をひきつけ、多様な視点から現象を考察するのに必要なスキルを発展させる。

## 2-4 柔軟性

地元民が身につけている多様な視点の本質的な特徴は、分割され、状況によって変わる地元意識である。状況によって、個性の表れ方は大きく変わってくる。状況によって個性が変わることが理解できれば、個性の可能性は一側面に縛りつけられないということが認識できるのである。

## 3. 地元の多文化の象徴としてのレインボーマンとキカイダー

1974年からの70年代、日本の子供向け実写テレビ番組のハワイでの人気は爆発的であった。ホノルルのテレビ会社 KIKU がそういった番組の放送を通して、ハワイに日本のスーパーヒーローを提供し、そしてハワイの人々はそれを喜んで受け入れた。その中には、レインボーマン、キカイダー、キカイダー 01、仮面ライダー V3、電人ザボーガー、ダイヤモンドアイ、今日のパワーレンジャーの前身となったゴレンジャーといった特撮キャラクターが含まれている。一般的に、全ての特撮シリーズはハワイで人気があったが、その中でもレインボーマンとキカイダーマンが一番人気があった。キカイダーは特に、子供、親、そして祖父母の想像力をかきたてる。1975年の絶頂期には、ゴールデンタイムのニールセンの調査による視聴率でダントツの26%をはじき出していた。これは、小さくてあまり知られていない、日本の老人向けチャンネルと思われていたテレビ局の KIKU にとっては、非常に珍しいことであった。<sup>7</sup>

これだけ広い支持を得ることとなった番組を選択したことは、当時の KIKU の支配人 Joanne Ninomiya の功績である。厳密に、これらの番組の何がそんなにハワイの人々に気に入られる理由だったのだろうか。不朽のファン団体の中では特にそうなのだが、多くの説明が考えられる。しかし、ここで私が提案したいのは、初期の1974年に、2人のスーパーヒーローの特徴が、地元の多文化を体現して、様々な民族的背景をもつ地元民と特に共鳴したということであった。地元文化の重要な特徴が表現されていたことで、当然地元民はこれらの特定のスーパーヒーローと自分達とを結びつけて考えたいと思っていた。体現されていた特徴は、多様な視点という概念の中で、重要なものであり、これらの特徴、すなわち、多様性と柔軟性を尊重することは、ハワイの地元の多文化にとって必須というだけでなく、多様な状況における多文化主義と多文化教育の決定的な特徴でもあるからである。



レインボーマンとキカイダーの場合、両方のスーパーヒーローが外面的に、多様性と柔軟性を表していた。2人とも複数の個性を持ち、状況によって変わることのできる能力を持っていた。キャラクターが経験するスーパーヒーローの変化を表す日本語は変身。変身特撮キャラクターは、1970年代に日本で出現したが、今でも人気があるということは、パワーレンジャーを見れば明白である。ハワイの想像力を一番最初にかきたてた、最も重要な2人の変身特撮キャラクターは、レインボーマンとキカイダーだったのである。

### 3-1 レインボーマン

レインボーマンは、この2人のスーパーヒーローの中では、先に KIKU テレビに現れた。人間の姿をしたこのヒーローは、基本的には7つの異なるスーパーヒーローに変身することができる。彼はまた、状況によって、この7つの姿を組み合わせた姿に変身することもできるのである。それぞれの姿は異なる外見、テーマカラー、特別な技を持っていたため、それぞれのスーパーヒーローの姿が異なっている、1人の人間の化身ということになる。レインボーマンは仏教の教えと深い瞑想により受け継いだこの超能力を使って、変身するのである。

レインボーマンは彼自身の存在の中に、多様性を体現している。それは、持っている多様な視点をその状況に合わせて使っている多文化人である。例えば、地元の多文化の中で育ち、民族的にはネイティブハワイアンの人が、日本の文化的な慣習やアメリカのビジネス姿勢に造詣が深かったりするということである。家では、ネイティブハワイアンの文化の慣習や、地元の多文化の慣習を中心に暮らしているかもしれない。仕事場では、ビジネスの状況において、アメリカの白人のビジネス慣習にのっとって働いているかもしれない。そして、日本レストランや日本への出張など、日本的な環境では、日本文化の知識にのっとって行動するかもしれない。同一人物が、多様な視点、すなわち一面に束縛されない多様な知識を、状況に応じて使うことができる。この人物もまた、レインボーマンのように状況に合わせて変身できているといえるだろう。

### 3-2 キカイダー

キカイダーもまた、レインボーマンのように多様性と柔軟性を体現している。キカイダーは、人間の姿とロボットのようなサイボーグの姿を持った、スーパーアンドロイドである。人間の姿をしているときは、彼はジローです。雑魚相手なら、キカイダーは、ジローとしてでも勝つ事ができます。しかし、破壊部隊の主要な悪者と戦うためには、毎回スーパーヒーローであるキカイダーの姿に変身しなければならない。彼の変身の特徴は、変身の合図となる一連のアクションにある。この変身アクションは、東映の特撮キャラクターの定番であるため、レインボーマンのように、キカイダーも状況に応じて姿を変化させることができる。

キカイダーの多様性は、どのように外見が表現されているかによって特徴づけられている。

彼の頭と体は対称的に2等分する中心線で区別され、彼の体の片方は全体的に赤く、もう片方は全体的に青である。外見的にも、キカイダーは二つの半身から成り立っているという特徴があり、それはキカイダーが多様性を肉体的に表現したものだからである。

### 3-3 ハワイ地元民の間での特撮の人気

キカイダーはどのスーパーヒーローよりも多様性を体現している。このことは、25%から30%の人口が人種的に混合した祖先を持っている国では、とても意味のあることである。私の考えでは、キカイダーの人気は民族的に日本人であるの人々の間にとどまらなかったと思う。なぜなら、ハワイでは、1970年代までには、多くの子供達は民族的に混ざり合っていたか、もしくは混ざり合った祖先をもっていたからである。ほかのどの場所よりも多様性が日常の中にあるハワイの人々と相通じるものがあり、そしてその多様性を肉体的に表現するスーパーヒーローが初めて現れたのであった。これが、日本よりもハワイでのキカイダーの人気が高かった主な理由だと思われる。アクション、特殊効果、そして万人に通じる特撮番組のテーマは、その番組のためにだけに作られる素晴らしい音楽や、魅力的な原色使いといったほかの要素と上手く溶け合っていた。(Ninomiya, 2007)<sup>8</sup>これらの要素はハワイでも、人気の大きな引き金となった。さらに、キカイダーのような番組のほかの重要な要素も、ハワイの構造がもつ独特な側面の中で存在した。

### 3-4 アジアの表現と地元の文化

最初に、多くの非白人のハワイの子供達が、非白人の主人公へアクセスができた。9時代劇やカンフー映画を通してアジアの力強い理想の姿へアクセスする事が出来、またこれらの番組は子供向けに作られていたため、すぐに子供達のお手本となる。非白人のハワイのこどもたちは、白人のスーパーマンやアクアマンより、人間の姿のレインボーマンやキカイダーと自分達を結びつけることができた。少なくとも、これらの日本から輸入された番組によって、子供達のヒーローの選択肢は広がったのであった。

現在ハワイやアメリカでテレビ放送されている特撮ものと、その時ハワイで見ることができた特撮ものの違いを述べたいと思う。パワーレンジャーを例に考えて見よう。今日、アメリカの観衆用にディズニーが公開しているバージョンには、二つの主な違いがある。第一に、アメリカ向けの特撮ものは今は、英語吹き替えになっているということである。第二は、スーパーヒーローの人間の姿が、もはや日本人だけではないということである。彼らの多くは白人で、英語を喋る。そのため、パワーレンジャーがアメリカの子供、特に男の子の間で人気があるのは、アクションと特殊効果と万人向けのテーマによるところが大きい。今日のパワーレンジャーと、1970年代にKIKUが放送していた、その前身であるゴレンジャーの大きな違いは、人間の姿の表現にある。昔、ハワイのテレビに映っていたレンジャー（ゴレンジャー）は、ア

多様な社会における多文化教育アプローチとしての多様な視点の尊重と涵養（ジェフリー・A・S・モニーツ）

ジア人であった。現在放送されているレンジャー（パワーレンジャー）は、ほとんどが白人である。人口の多くが白人でないハワイにとっては、これは特に重要な違いである。

### 3-5 共有関心

ハワイでの人気に貢献した、子供向け特撮番組のもうひとつの特徴には、世代を超えての関心が挙げられる。1970年代、民族的に日本人の世帯では、一世、二世、三世が一緒になってキカイダーを見るために KIKU にチャンネルを合わせることはめずらしくはなかった。Joanne Ninomiya が、ジローとイチローを演じた伴大介とキカイダーとキカイダー 01を演じた池田駿介に行ったインタビューの中で、ハワイの世代を超えた関心は、日本のものとは違っていると、両者とも一致していっている。日本では、大人は子供向け番組を見下していた。それは、日本の親たちは、子供達にアクションヒーロー番組を見て欲しくないと思っていたからなのである。

ハワイと違って、日本の親や祖父母は特撮ものに関心を持っていなかった。ハワイでは、祖父母達の間で人気の時代劇を制作している東映のプロデューサーが、一世と二世が大好きな東映の番組も制作しているといった事が珍しくはなかった。同じテレビ局で放送される特撮番組は、祖父母の好きな時代劇と似たテーマや武道の動きを含んでいる。特撮ものは時代劇と同じように、英語の字幕がついており、親しみやすさと日本文化への関心と愛が、両親や祖父母の支持と関心を集めた。

当時、局の支配人だった Joanne Ninomiya は、日本人でない親たちも非常に寛大で、家で日本語のテレビ番組を見ることを子供に許していた、と当時を振り返っている。これは素晴らしいことで、ハワイの多文化社会の開放的な特徴によるものが大きいと、彼女は考えています。実際、1970年代にハワイに住んでいた日本人でない子供達は、今では親や祖父母になりましたが、今でも彼らの子供達と一緒にキカイダーのような番組を楽しんでいる。

## まとめ

ハワイと特撮ものの熱烈な関係は今でも続いている。日本発のレインボーマンとキカイダーマンはハワイの地元の多文化に、偉大な功績を残した。これらのスーパーヒーローは、ハワイの地元の経験、すなわち複合的な視点、多様性、柔軟性を尊重する経験、を象徴している。これらの概念は多文化主義、多文化教育において非常に重要な要素でもあり、人種間の違いであっても、社会経済的な違いであっても、世代の違いであっても、多様な視点を尊重するということは、我々それぞれの背景の融合が素晴らしいことだと認識することであり、交流や共通の経験をもとにした未来の構築をすすめることでもあるのだ。



[参考文献・参考事項]

- (1) Agar, M. (1994) 『Language shock: Understanding the culture of conversation』(言葉の衝撃: 会話文化の理解) New York 発行元: Quill
- (2) 提供者: Chang, G., Tonouchi, L., Yamasato, A. (2004年10月)  
『Kikadology 605. In C.』  
司会者: Gusukuma  
パネルディスカッション: Japanese Super Heroes (ジャパニーズスーパーヒーローズ)  
キカイダー 30周年記念フェスティバル 於: Japanese Cultural Center of Hawai'i, Honolulu, HI.  
(ホノルル, ハワイ日本カルチャーセンター)
- (3) Chang, J. (1996). 『Local knowledge(s): Notes on race relations, panethnicity and history in Hawai'i』  
(人種関係, 人種の壁を越えた考えについての記録, ハワイの歴史)  
掲載紙: Amerasia Journal, 22(2), 1-29 Los Angeles 発行元: Asian American Studies Center Press, University of California, Los Angeles.
- (4) DeLima, F. (1991). 『Frank DeLima's joke book』(Frank DeLima のジョークブック)  
Honolulu, HI 発行元: Bess Press.
- (5) Generation Kikaida website. (キカイダー世代) 2007年8月検索 <http://www.generationkikaida.com>
- (6) Grant, G. (2000). 『Hawai'i looking back: An illustrated history of the islands』  
(振り返るハワイ: 写真で表す島の歴史) Honolulu, HI 発行元: Mutual Publishing.
- (7) Henshin!Online website. (返信オンライン) 制作者: Ragone, A. (Co-founder) (共同創設者).  
2007年8月検索 <http://www.henshinonline.com>
- (8) Lind, A. W. (1938). 『An island community: Ecological succession in Hawaii』  
(島社会: ハワイの環境の継承) Chicago, IL 発行元: University of Chicago Press.
- (9) インタビュー: Ninomiya, J. (Interviewee) (受け手). 制作: JN Productions, Inc. (Producer).  
(制作会社) (2007). Kikaida 01 [Promotional DVD, Disc 6].  
(キカイダー 01販売促進 DVD ディスク6 巻)  
(Available from JN Productions, Inc., 2153 N. King Street, Suite 316, Honolulu: HI 96819; [www.generationkikaida.com](http://www.generationkikaida.com)) (JN プロダクションより販売中)
- (10) インタビュー: Ninomiya, J. (Interviewer) (聞き手)  
with Daisuke, B. & Shunsuki, I. (Interviewees) (受け手)  
JN Productions, Inc. (Producer) (制作会社) (2007). Kikaida 01 [Promotional DVD, Disc 6].  
キカイダー 01 (キカイダー 01販売促進 DVD ディスク6 巻)  
(Available from JN Productions, Inc., 2153 N. King Street, Suite 316, Honolulu: HI 96819; [www.generationkikaida.com](http://www.generationkikaida.com)) (JN プロダクションより販売中)
- (11) 意見提供: Ninomiya, J. (personal communication, August 27, 2007). (個人的な交流)
- (12) Okamura, J. Y. (1980). 『Aloha kanaka me ke aloha 'aina Local culture and society in Hawaii』(ハワイの地元文化と社会) 掲載紙: Amerasia Journal, 7(2), 119-137. Los Angeles  
発行元: Asian American Studies Center Press, University of California, Los Angeles.
- (13) Okamura, J. Y. (1998). 『The illusion of paradise: privileging multiculturalism in Hawai'i』(楽園の幻影: ハワイの多文化主義の恩恵) 掲載論文: In D. C. Gladney (Ed.), Making majorities: constituting the nation in Japan, Korea, China, Malaysia, Fiji, Turkey, and the United States (多数派の形成: 日本, 韓国, 中国, マレーシア, フィジー, トルコ, 米国での国家の形成) (pp. 264-284).

発行元：Stanford, CA: Stanford University Press.

- (14) Rademaker, J. A. (1947). 『Race relations in Hawaii, 1946』 (1946年, ハワイの人種関係)  
掲載紙：Social Process in Hawaii, 11. Honolulu, HI 発行元：University of Hawai'i Press.
- (15) Ragone, A. & Cassidy, J. (2004). 『All about Kikaida』 (キカイダーのすべて) In JN Productions, Inc.  
(Producer) Kikaida [Discs 8 and 9]. (Available from JN Productions, Inc., 2153 N. King Street,  
Suite 316, Honolulu: HI 96819; [www.generationkikaida.com](http://www.generationkikaida.com))  
(JN プロダクション制作のキカイダー 8巻と9巻に含まれています)
- (16) Rosa, J. P. (2000) . 『The Massie Case narrative and the cultural production of Local identity in  
Hawai'i』 (Massie Case について, そしてハワイの地元意識の文化的創作)  
掲載紙：Amerasia Journal, 26(2), 93-115. Los Angeles 発行元：Asian American Studies Center  
Press, University of California, Los Angeles.
- (17) 意見提供：Shigaki, J. (personal communication, August 25, 2007). (個人的な交流)
- (18) Tokusatsu Planet website. 創設者：Souza, P. (Founder).  
2007年8月検索：<http://groups.yahoo.com/group/tokusatsuplanet>
- (19) Tonouchi, L. (2006). 『Diff'rent stations』 (ディファレント・ステーションズ)  
掲載紙：boundary 2, 33(2), 27-30. Durham, N.C. 発行元：Duke University Press.
- (20) Yamamoto, Eric. (1979). 『The significance of local』 (地元の意義)  
掲載紙：Social process in Hawai'i, 27: pp. 101-15. Honolulu, HI  
発行元：University of Hawai'i Press.

#### [注]

- (1) Willie K はハワイで尊敬される人気ミュージシャン, Willie Kahaialii のステージネームである。彼は多彩なギターテクニックと音域の広い声でよく知られている。ハワイのモロカイ島マウナロア市民公園でのコンサートは1997年に開催された。
- (2) キカイダーの歌詞は <http://www.generationkikaida.com> に掲載されている。このサイトはハワイのファンが、1970年代にハワイで放送されたキカイダーや他の日本の子供向け番組のキャラクターのために作っているものである。
- (3) ジェネレーション X とはおおむね1960年代から1970年代に生まれた世代のことである。
- (4) 特撮とは、スーパーヒーローの物語を、特殊効果や実写を使って描いた、日本の子供向け映画・テレビ娯楽番組のジャンル。
- (5) 筆者はキカイダーの影響について分析している先行研究、特にホノルルで2004年10月30日に行われたキカイダー 30周年フェスティバル、「Kikaidology605」のプレゼンターに謝意を示したい。Greg Chang, Lee Tonouchi, Aaron Yamasato がパネリストとして参加したパネルディスカッションでは Chance Gusukuma は司会者をしていて、Pomai Souza は「特撮プラネット」というオンラインディスカッションの司会をしている。「変身！オンライン」の創設者である August Ragone と John Cassidy は JN Production, Inc. が制作している「キカイダー DVD ボックスセット」の8巻と9巻の特典として含まれているキカイダー完全ガイドを執筆した。
- (6) ここで使われている「言語文化」(langaculture) は、Paul Friedrich の「linguaculture」という考え方から、Michael Agar が発想したものである。この考えは、一体となっている文化とその言語を強調するものである。参照「Language Shock: Understanding the Culture of Conversation」(1994) New York: Quill

- （7）これは、局長であり後に KIKU の社長になった、Joanne Ninomiya さんから得た情報である。2007年に発売されたキカイダー 01の DVD に含まれている、2007年8月22日のミーティングと、2002年に行われたインタビューで、この情報を提供してくれた。
- （8）個人的な交流の中で、Jon Shigaki はキカイダーの人気における色の重要性を強調した。キカイダーの、主に赤と青の（スーパーマンやスパイダーマンのような）色使いは、アメリカの愛国的な色使いを反映しており、これによって米国においても受け入れられやすくなっているとの理論を Shigaki はたてている。
- （9）2006年夏に発行された boundary 2 に収められている、Lee Tonouchi の “Diffrent Stations” というハワイでのアジアの理想の姿についての詞を読んでいただきたい。

（ジェフリー・A・S・モニーツ ハワイ大学マノア校教育学部）

2007年10月9日受理